

# プレゼンテーションの相互評価に見られる

## アノテーション集中箇所に関する分析

### Analysis of Where Real-time Annotations Are Located in Peer Reviews of Presentations

北村雅則\*

山口昌也\*\*

Masanori Kitamura\*

Masaya Yamaguchi\*\*

\*南山大学

\*\*国立国語研究所

\*Nanzan University

\*\*National Institute for Japanese Language and Linguistics

<あらまし> プレゼンテーション中、相互評価（リアルタイムアノテーション）をした後、それらに対してコメントを5箇所程度残すという振り返りを行った。アノテーション集中箇所についてアノテーションの数・観点・種類とコメント数との関連を分析すると、アノテーション数が多かったり、観点・種類数のばらつきが大きかったりするとコメントが残されず振り返りの着目点になりにくいことや、種類「惜しい」のアノテーションには観点の関係でコメントされにくい例や同観点・種類への複数アノテーションの方に注目が集まった例が観察された。  
<キーワード> 相互評価, アノテーション, プレゼンテーション

#### 1. はじめに

我々は、FishWatchr (FW)とFishWatchr Mini (FWM)という学習支援システムを用いて、プレゼンテーションのリアルタイム相互評価とその結果を用いた振り返り実践をしてきた(北村 2023)。本研究ではアノテーションが集中する箇所について、振り返りコメントを残す際の関連性を分析する。

#### 2. 実践の概要と分析の方針

授業実践の概要は以下の通りである。

- (1) 大学1年生17名、3~4名の5グループのグループプレゼンテーションで、分担して全員が発表する。
- (2) 聴衆はFWMを用い、「【観点】:話し方, アイコンタクト, ジェスチャー・工夫, スライド, (内容の)新規性, (内容の)有用性」と「【種類】:良い/惜しい」をリアルタイムでアノテーションする。
- (3) 各自FWを用いて、自分の発表箇所の録画映像とアノテーションを見て振り返り、納得できた5箇所程度のアノテーションに対してコメントする。

アノテーションは発表の中で注目が集まった箇所に集中し、その箇所は振り返り時に参考とすべきポイントになりうる。しかし、アノ

テーションの集中箇所では【観点】や【種類】にばらつきが見られたり、アノテーションが集中するがゆえに何に着目すればよいかわからなくなったりするなど、振り返り時に惑わされる要因にもなりうる。したがって、振り返りコメントを残す際、アノテーションの集中箇所のどのような点に着目しているのか、以下の3点から分析を試みる。

- A) 1単位のアノテーション数
- B) 1単位における【観点】・【種類】数
- C) 1単位の中の【種類】「惜しい」

#### 3. 分析

##### 3.1. アノテーションの概要

アノテーションの集中箇所とは以下の基準によって認定した。

- ・連続するアノテーションの間隔が3秒以内である。
- ・アノテーションが途切れず連続する場合は、最初のアノテーションから9秒以内とする。

アノテーションは計1770箇所あり、そのうちアノテーションが集中する箇所(以下、単位と称す)は350単位(アノテーション数1461箇所(82.5%))であった。振り返り時のコメント総数は123箇所であり、そのうちの91箇所(74.0%)がアノテーションの集中箇所

に見られた。この結果から見ればアノテーションの集中箇所注目してコメントが「残」されたとは言いがたい。

### 3.2. A) 1 単位あたりのアノテーション数

1 単位あたりのアノテーション数とコメント数の関連性を表 1 に示す。表中の「アノ」とは 1 単位あたりのアノテーション数のことで、行見出しにおける「非」とは非集中箇所、数値 2～10 は 1 単位のアノテーション数を表す。列見出しの「単位」とは集中箇所数、「コメ」とは当該箇所へのコメント数である。なお、アノテーション数は 11 から 18 までも存在するが、コメントが「残」されていないため表 1 には非掲載とした。

表 1 アノテーション数とコメント数

アノ	非	2	3	4	5
単位		108	77	52	27
コメ	32	21	20	10	12
アノ	6	7	8	9	10
単位	27	20	12	12	7
コメ	11	1	4	6	6

1 単位あたりのコメント数でいえば、アノテーション数の 7 などを除くが、アノテーション数 10 までが活発であり、それ以上になるとアノテーション数の多さに対してコメントが「残」されなかった。ここからアノテーション数の多さはコメントを「残」す際に着目点にはならないということが言える。

### 3.3. B) 1 単位における【観点】・【種類】数

1 単位の【観点】・【種類】数とコメント数の関連性を表 2 に示す。「観・種」とは 1 単位にどれくらいの【観点】と【種類】が現れたかということを示す。可能性としては 6 観点 × 2 種類で 12 まであり得るが実際には 9 までであった。

表 2 観・種数とコメント数

観・種	1	2	3	4	5
アノ	24	132	92	57	31
コメ	4	29	25	18	8
観・種	6	7	8	9	
アノ	25	13	11	10	
コメ	6	1	0	0	

観・種数とコメント数の関係を見ると、観・種数の 2～6 までは 2～3 割のコメント付与率であるが、それ以上である 7～9 ではコメントが少ないか、「残」されない。3.2 に述べた通り、1 単位のアノテーション数 11 以上にはコメントがなかったことと合わせて、アノテーション数のみならず、観・種数も多すぎる

と着目する点が定まりにくくなり、振り返りには活用されない様子うかがえる。

### 3.4. C) 1 単位の中の種類「惜しい」

種類「惜しい」は振り返り時の着目点となりうるが、すべての「惜しい」というアノテーションに対してつけられたコメント数が 53 だったのに対し、1 単位中の「惜しい」に対するコメント数は 40 (約 75%) となり、単位中の「惜しい」が注目されたとは言いがたい結果となった。また、アノテーションの集中箇所に「残」されたコメント数が 91 であったこともふまえると、半数以上が「良い」に対するコメントであり、ここからも「惜しい」に着目しているわけではないことがわかる。

1 単位の中に「惜しい」があるにもかかわらず、「良い」にコメントしたものは 11 単位 (コメント数 13) であった。顕著な例を挙げると、この中の 4 単位は「有用性 (惜)」であり内容面での指摘であるため、今後の改善につなげにくく他の箇所にコメントしたと思われる。また、他の例としては「スライド (惜)」にコメントせず、他のアノテーションにコメントしたものがあつた。この単位はアノテーション数が 3 で、「スライド (惜)」以外は「新規性 (良)」であった。コメントも「新規性 (良)」に関するものであつたことから同「観・種」の複数アノテーションの方に着目したと推察される。以上から、種類「惜しい」が振り返り時にそれほど着目されないのは、コメントしづらい、他に着目する理由があるなどの要因があることがわかる。

## 4. おわりに

以上の分析により、A) からは 1 単位あたりのアノテーション数が 10 までコメントされること、B) からは 1 単位の観点・種類数が多すぎても注目されないこと、C) からは「惜しい」であってもコメントしづらいものや同「観・種」のアノテーションなど他に着目する理由があつたことが判明した。この結果をもとに振り返り支援策の拡充に努めたい。

### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K03116 の「助」成を受けたものである。

### 参考文献

北村雅則 (2023) スマートフォンを使用した相互評価に見られるアノテーション傾向と問題点の分析. アカデミア 人文・自然科学編, 25, pp.1-13